

# ああ、 結婚！

—婚活日記—

第16回

黒田長宏

いうのに、Mさんに「このチェック作業は必要なのか」と言い出したのだ。これでは、例えば必死にカンナで板を作っている大工さんを前にして、この家建てる必要があるかしらと言われたことに近い仕打ちを受けたような気がした。上司2人には報告したが、今日もまだそれが脳裏から離れないのでここに書く。むしろ、42号で書いておいたほうが過去になってしまう事柄かも知れないが、この連載のメインである結婚難問題にせよ、男女雇用機会均等法などが進むにつれ、企業にどういられるかどうかは大事で、おそらく自ら命を絶ってしまうような人達も職場がらみ、すでに学生時代がらみという例も多く聞かすが、新型コロナウイルスに限らず、ゲゼルシャフト上の付き合いからも動揺は起きる。

◆今朝は今朝で某マッチングアプリから、メッセージが久しぶりに来ていたので、またろくな返信ではないだろうと思って開けてみるとその通りで、ブロック機能に数的制限があるので私のほうからブロックしてくれないか。兄が外科医だし、私と交際になったらその人のご両親が驚いてしまうだろうとのことだった。謙虚なようで資本主義社会特有の身辺有利からの格差を私に振りかざしたようにも思える。女性側からの発信が私を傷つけるという時期もあるだろう。だが、私自身の考え方、捉え方で出てくる反応の型でもあるだろう。Mさんとはまだほとんど交流がないが、Gさんとはけっこういろいろ喋ってきたと思う。

<8月7日>

42号の原稿を投稿した。時は新型コロナウイルスの流行中で先がまだ見えてこない。

<8月19日>

まだ42回の原稿締め切り前だが、私は既に提出してしまったのだが、平凡な連続の中で、昨日から多少変なことが出てきた。職場のGさんが新人のMさんと、私がしている作業のチェックに来たのだが、Gさんが私が作業していると

<8月29日>

前回は職場の事で字数を稼いでしまった。しかしあまりに婚活日記なのに職場の心配を書くなんて関係ないだろうと思う人がほとんどだろうが、天才というのは時間と空間に関係があると考えた昔の舌出して写っているような人のように、関係ないと思われるところから関係性を見つけられる人である。そういう人は滅多にいない。

今日は、茨城出会いサポートセンターからのアンケート依頼をずっと置いておいたので、書いてポストに入れてきた。そこはほとんど応じる人がいないからという理由もあり、年齢差制限をもうけているのだが、私はその年齢差制限があるので退会したまま復帰するつもりなしと書いた。思えばこのセンターのおかげで三日間だけ実質的に結婚できて、三年近く裁判をされて離婚してしまったわけだが、効果はかなりある組織であるようだ。しかし15歳差で結婚している人もいる。そこでは当時8歳差以上は申し込みできないということだった。これでは男性は生涯生殖能力は一応あるらしいのに、女性のほうが比較的早期に生殖能力は無くなるらしいのなら、年の差婚は少子化対策である。ここが天才でないところだ。何を書いているんだと読んでも思う人ばかりだと推定する。そして某マッチングアプリの応募を終えたところである。これから婚難救助隊としてのユーチューブを撮影してアップする。その後は考えて過ごす。

<9月3日>

昨日今日と連休だったので、一昨日だったか、朝の着替え中に一本の赤い糸が出てきた。なんの赤い糸かは不明である。赤い糸といえば、誰かと誰かのご縁の繋がりを赤い糸であらわす伝承がある。なにか期待したいなと思った。今日はかなり久しぶりに某マッチングアプリに自分の写真や周囲の物などの写真を変えたり、余計だったと思われる文を消したりした。新型コロナや暑さや風雨など落ち着かない時期だが、『私の家政夫ナギサさん』というドラマでは20歳以上の年の差婚が達成された。テレビ局もこうした例を挙げてくれると助かる。年の差婚は別に悪い事じゃない。

<10月11日>

53歳と4か月になってしまったなと思いつつながらマッチングアプリを起動するとかなり久しぶりにメッセージが入っていて期待したが、私は実子が諦められず、メッセージの相手は50歳だったため、残念ながら理由を言って断った。あと15年でもはやければ、残念。しかしマッチングアプリはまるで機能しないわけではないのがわかった。婚難救助隊としての唯一とっていいほどの活動であるユーチューブ活動だが、見聞録シリーズはやくも100回を超えた。登録者は7人に戻って過去最高だが、このところ批判が過激になってきたと自分自身は思っている。減らなければいいが。目指すはピコ太郎レベルのユーチューバーだ。継続は力なり。

<11月6日>

今回の締め切り通知がすでに来ていて、すぐ提出するタイプだったが今回はまだ提出していない。

1週間前くらいか、某マッチングアプリで40歳の方が私の応募に応じてくれたのだが、応募するとき一瞬、ルックス的に少しどうかと思ったがクリックしたものが、他の人達が応募しても何百人しても応答がないのに、その人に対しては相当なお礼を感じなければいけないのに、相手が東京都の住人で多少遠いのを理由にしてぐずらせてしまい終えてしまった。応募も誠実にしなければいけないのに私の悪いところが起きてしまった。ちょっと発疹が出来たり、ちょっとトラブルが起きたり、ここを抜けて頑張らねば。婚難救助隊を紹介するユーチューブはライフワークと思い、継続している。それしかないと思う。

<11月22日>

25日の締め切り日も勤務休日だが、今日これを書いたら提出しようと思う。今回は珍しく締め切り直前まで粘ったが、某マッチングアプリでは1人反応があったものの、懸命になれず、しかし女性のほうが圧倒的に男性を選んでいるような気もするし、私自身の年齢と実子を諦められないところがマッチングを難しくしているような気もするし、しかし現場では告白もできず、若いころのように突っ走るエネルギーもなくなったのか。『婚難救助隊』としてのユーチューブのほうは、登録者数が増えたといえば増え、2桁に乗った。現在ユーチューブ登録者1

1名。この数字が大事だ。本気で人気ユーチューバーを目指して生活できるようになって、結婚難問題を改善できる権力と金力を握りたい。